

『神経内科ハンドブック』の第3版が、200頁ほど増頁され発刊された。初版から15年、2版から9年を経た出版である。

初版では、米国の神経学卒後教育のいわゆる『レジデントマニュアル』日本版をめざして、日本での卒後教育のスタンダードたるべく編者は意図され、見事に成功を収めた出版であった。米国での神経学卒後教育の経験に、日本でのあるべき卒後臨床研修の標準を見極めて、2版、3版と改訂されてきたわけである。今回の第3版により、本書は間違いなく、臨床神経学診断と治療のバイブルとなったと言える。第2版では、神経疾患患者における臨床診断の最重要点である局所診断の項が加えられ、診断のプロセスの重要性が明らかにされたが、第3版ではそれをさらに重要と考え、まず第1章の神経学的診察法において、脳神経症状を十分に理解できるよう、たくさんの脳神経の解剖図譜が2色印刷で加えられた。理論だけでなく、臨床の実際を考え局所診断をするためには、その基礎となる神経解剖の知識が必須であることは言うまでもない。この点の教育がわが国ではないがしろにされており、その充実こそが実践の場における局所診断に必要なことは明白である。この本を読むことによりその知識が加わり、専門医試験の準備をする若手の医師、臨床の場で責任ある仕事をする専門医には、きわめて有用であろう。

もう1つの変更点は、第5章、診断と治療の章で、過去9年で進歩のいちじるしい分野での書き直しであろう。今回の改訂では、今までの自治医科大学神経内科関係者から順天堂大学脳神経内科に関係する分担執筆者に代わっている。特に、脳脊髄血管障害、脳腫瘍・脊髄腫瘍、炎症性疾患、神経変性疾患、筋肉疾患などは、まったく新しい内容に一新されている。

脳脊髄血管障害の項では、実際の現場の検査機器の進歩に対応して、多くのMRI、MRAおよびエコーなどのデータが新しくCT画像に取って代わっており、また新たに動脈解離や遺伝性血管障害のCADASIL、CARASIL、家族性凝固障害、抗リン脂質抗体症候群などの話題の疾患群も取り入れられた。脳腫瘍では、新しいWHO分類、脳腫瘍全国集計調査報告が加えられ、典型的脳腫瘍のMRI、CT画像が加わり、さらに神経内科医として最小限知っておくべき腫瘍病理所見もカラーで挿入された。炎症性疾患、変性疾患、筋疾患の項でも、新しい分子生物学的病態解明などの進歩に合わせて、きわめて妥当な書き直しがされている。

文献も新しいもののみならず、各事項の理解に必要な必須の文献も含まれているのがこのハンドブックの従来からの特徴でもあり、これらを含めて臨床の現場で働く医師のみならず、専門医試験をめざしている若い受験者には、きわめて有用な情報源となろう。

過去に編者と同じような米国でのレジデント経験をもち、同様の手引きを編もうとした私にとって、本書は、これ以上の教科書は作れないと諦めさせることになった神経学臨床のバイブルであり、編者の神経学における深い経験と高い教育理念に敬服するばかりである。

本書は、とりわけ神経内科専門医をめざして勉強している若手の医師、ベッドサイドで神経内科を勉強する高学年医学生のみならず、臨床の現場で神経疾患患者の診断・治療にあたるベテランの専門医にとっても、卒後教育の継続として第一にお勧めしたい教科書である。

(A5判 1,120頁 定価(本体13,500円+税))
2002年 医学書院刊